種覚書圖書館之印
へ13
3755
14

志乃夢

廿六編上

仕題曲五団扇

門へ13
3755
14

白縫譚 六上集

柳下梅蝶

坂部蔵書

四時ふ無聲の響物四種あり。春ハ午祭の大鼓賣。夏ハ延命散賣秋ハ虫賣冬ハ正月ふのつと限る。空也寺の鉢扣。茶筌賣とハ何人の考しくふもとなるふ當今ハ其他ふも。呼ぞろろる活業ふ出来。街頭ぐ定鐸ふ驛路鈴ふ鳴ふ町飛脚ふ通行と誰も必定しる。是ハ四季にかつかつとふ或時ハ便士と替名ふついく遊女町の灯文ともあつへ。戀雜とのりふがつかつふ不斷の東西とへのりぬ叓ハ稲荷祭の大鞁と共ふ多分ハ春賣不計再會より。智月ふ吟と欸きこふ此編ハ虫賣の時恵穂や秋作と照葉ふ冬の夜ふ松代ふ亡魂ふ道すぐ清光尼ふ幽靈ふ水のまゐせろり鉢扣それにつよて。いつふ時を不嫺とてあまり季候ふ違ひそぐまバ風鈴捷歩を雇くありとも。開版を東府四里四方の看官ふ告ぐ思ふ意をそのまく舒詞ふ誌

安政戊午林鐘 千五

柳下亭種員

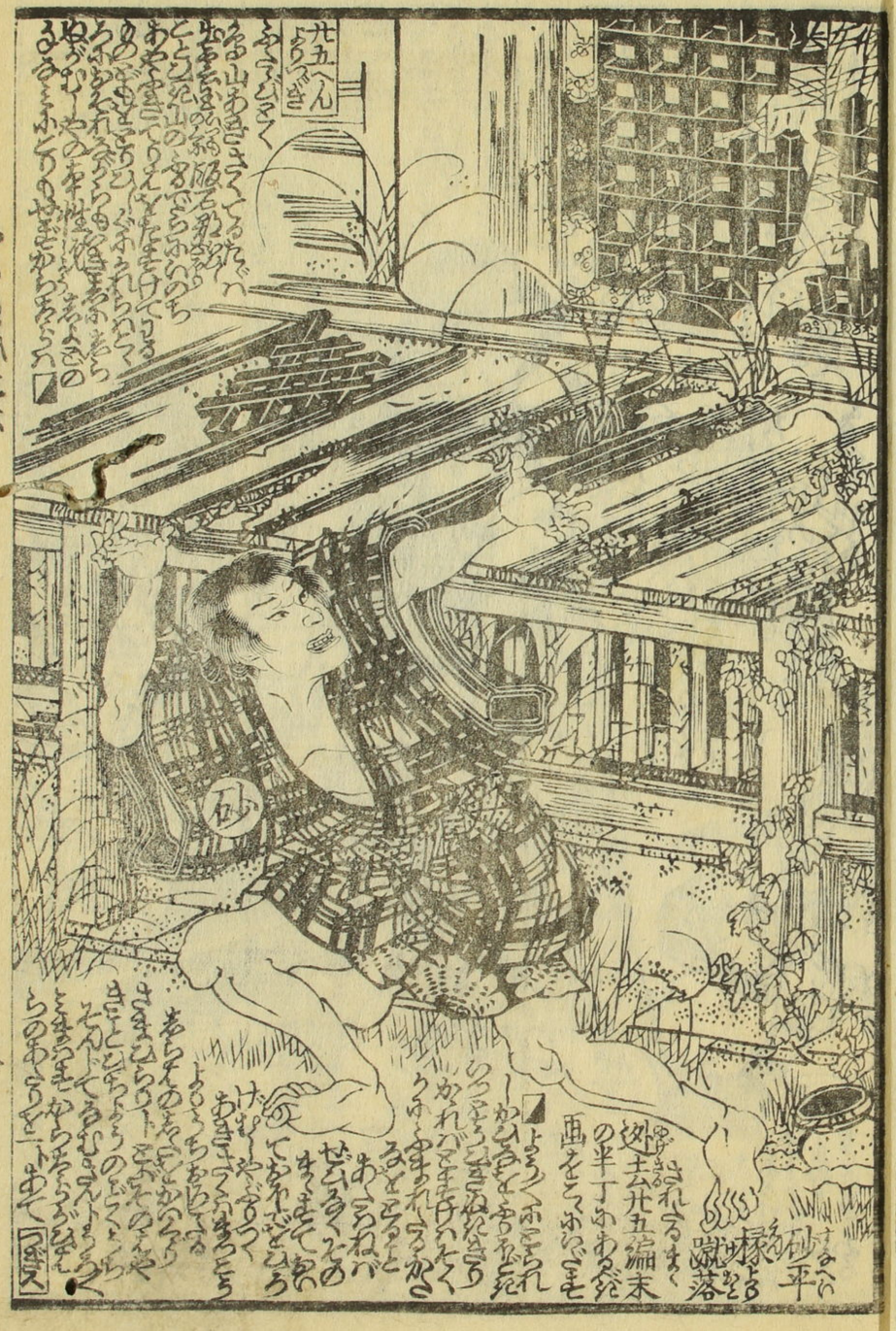
安白梅の君

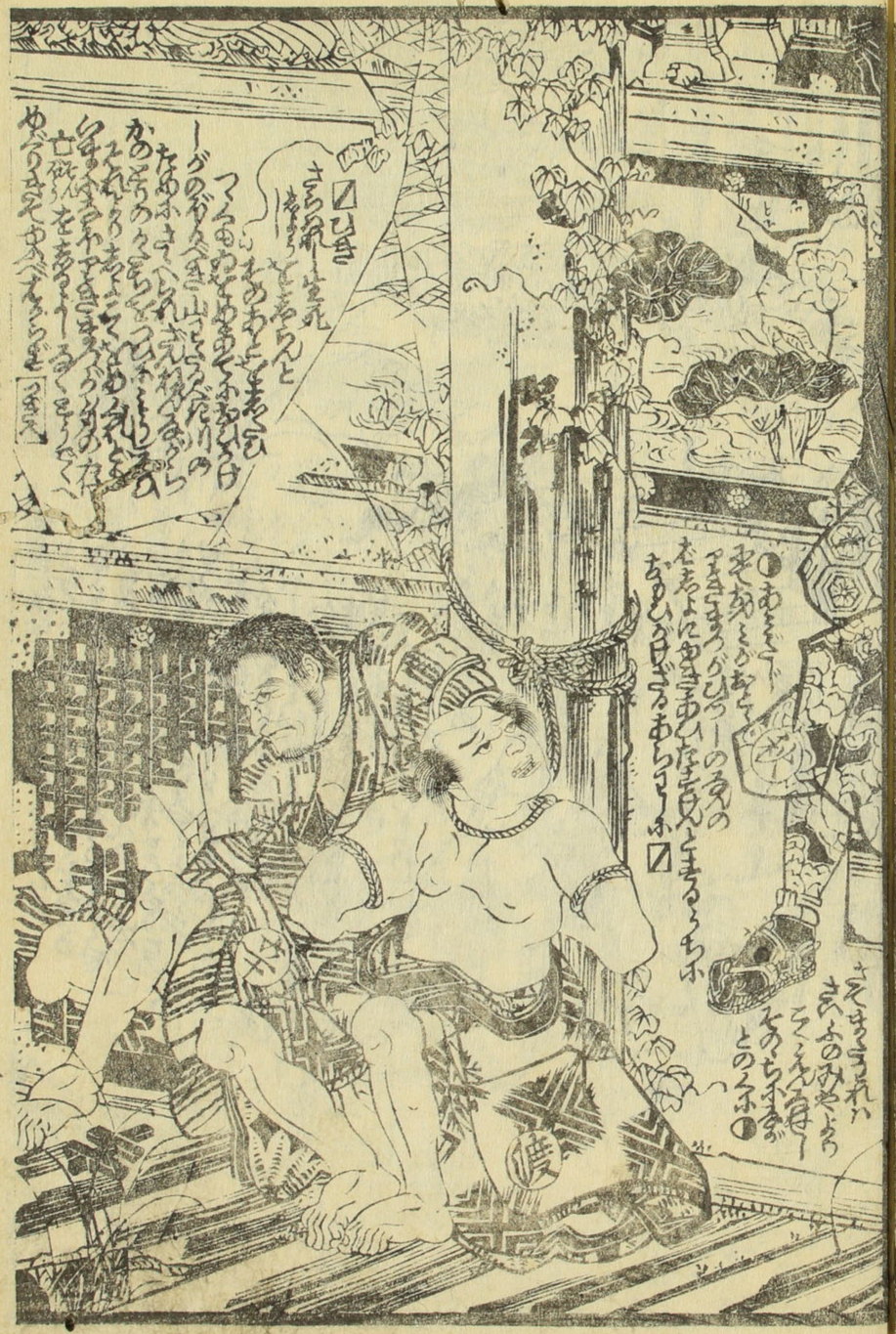
三筆山伊達五郎

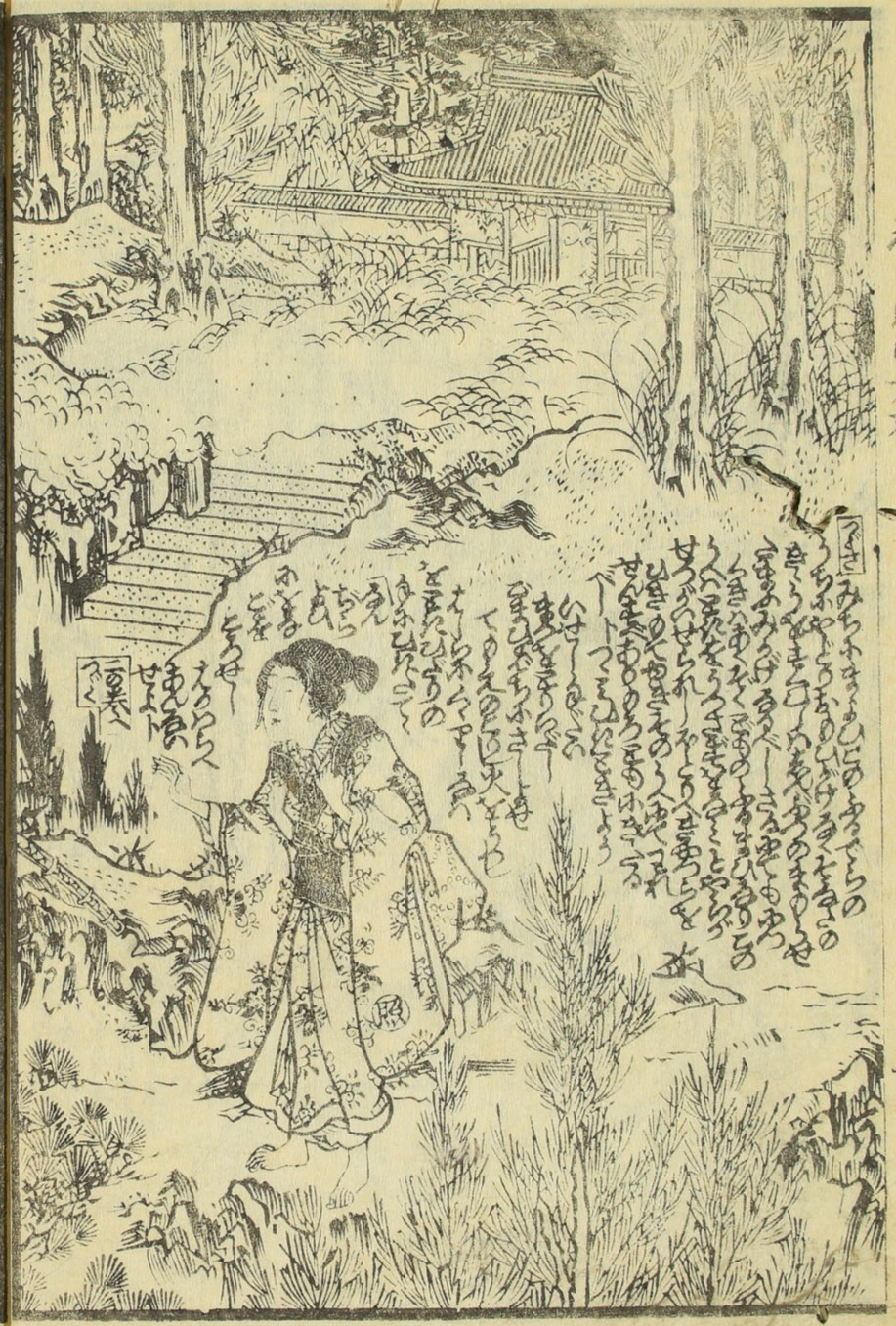
山鹿玄之亟の首級

玄之亟の妻雪江の首級

鷲津六郎正辰
團七


九九へんよりつづき
砂平
権助



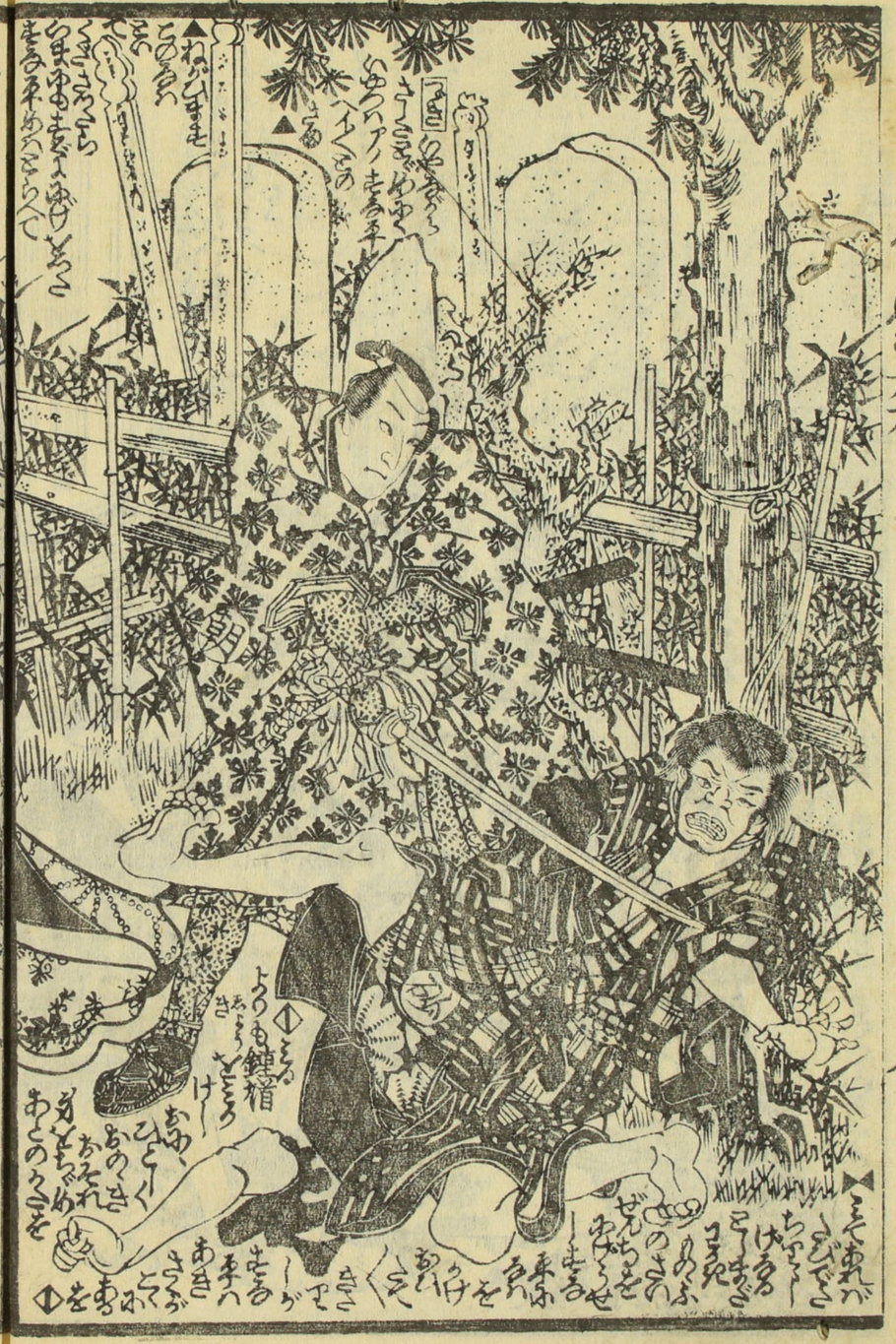


「ぐさ」たちつづ
のことくさまざま
まのくらべて
七十二候
のさゝ山を
ちゆくや
五月ろ
ふなの
ちものゝぐさ

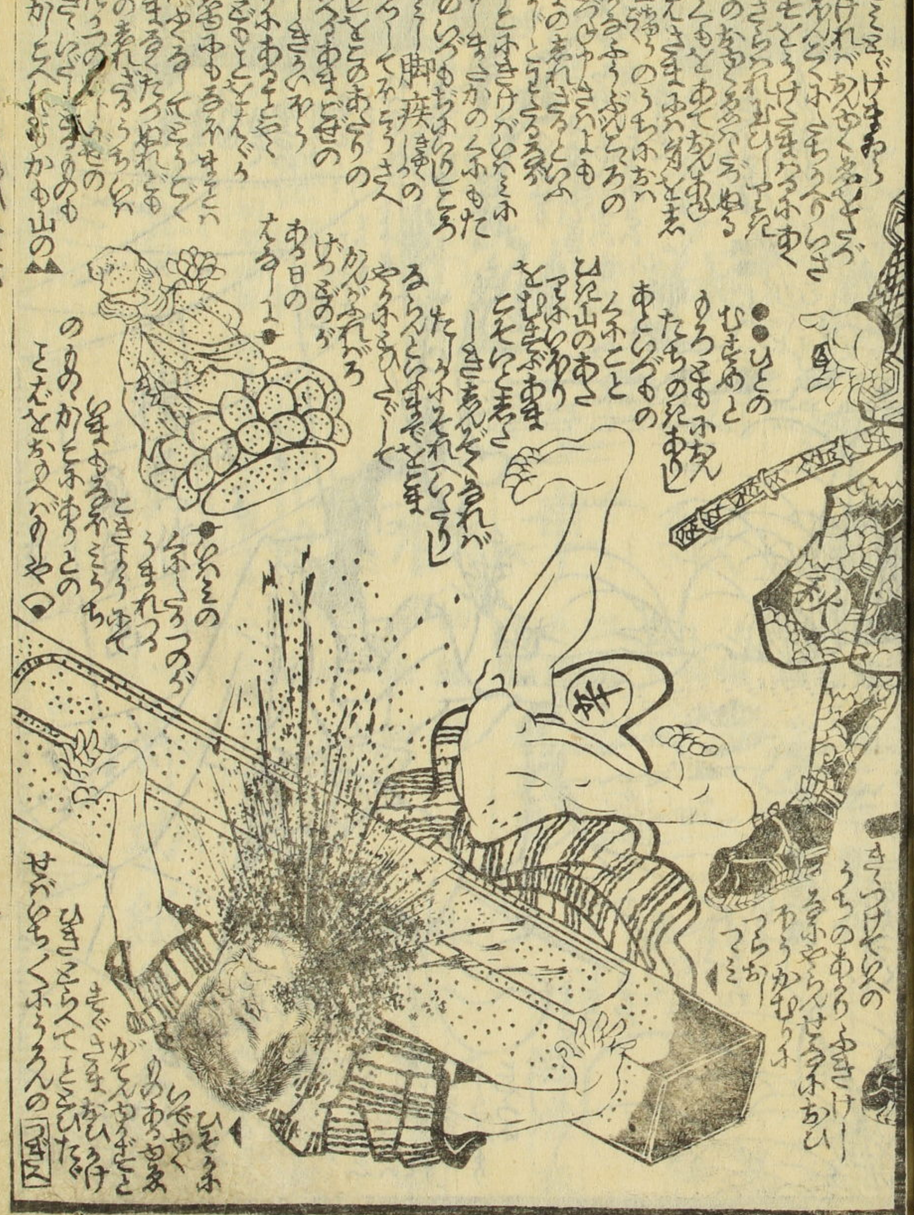
◆火をさーよそ
つらくこゝろふてりそゞつぴーふ
ひまくうたゞくぞーらの花、
うちうられみぎのうでをさ
さるあとうく
めをふく
けがもかいさんの
あるさまうれが
てるてこゝろふ者の
びっくうむるこゝろ
をとゞめまうらひで
「あゝのどくまりう
あつさせうきふんぜもてう
そをふゝうつ

◆あゝ
のさ
ひへ
ん
そ
ま
あ
ぐ
そ
ト
そのまうのを
たつ
ろ
ふ
ろ
ふ
て
あり

一ぢやもめを
ふ者まゝくト屑
おとこのこゝろ
ま
こ
う
ひ
ま
ろ
こ
ろ
つ
ま
ろ
ふ
者
ま
う
ろ
こ
ろ
つ
ま
ろ
ふ
ろ
ふ
ろ
ふ


秋

秋

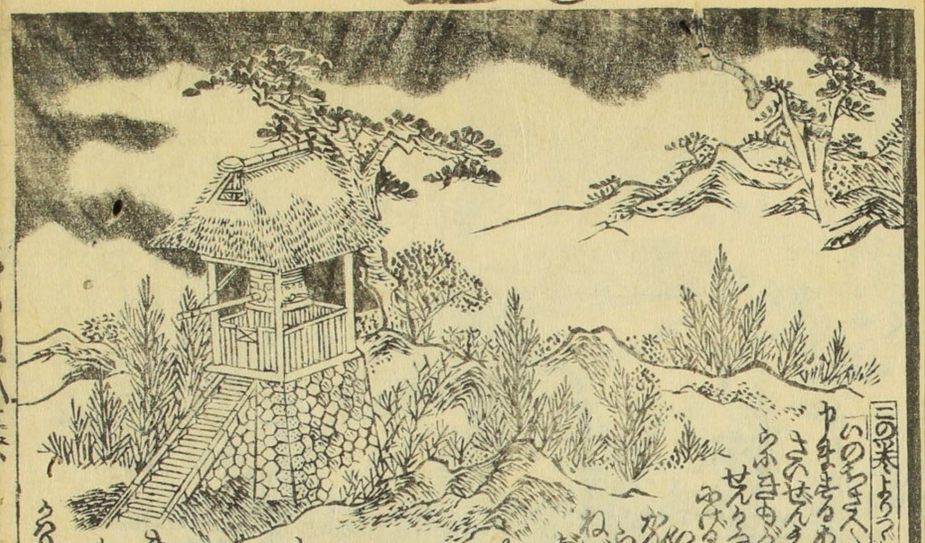


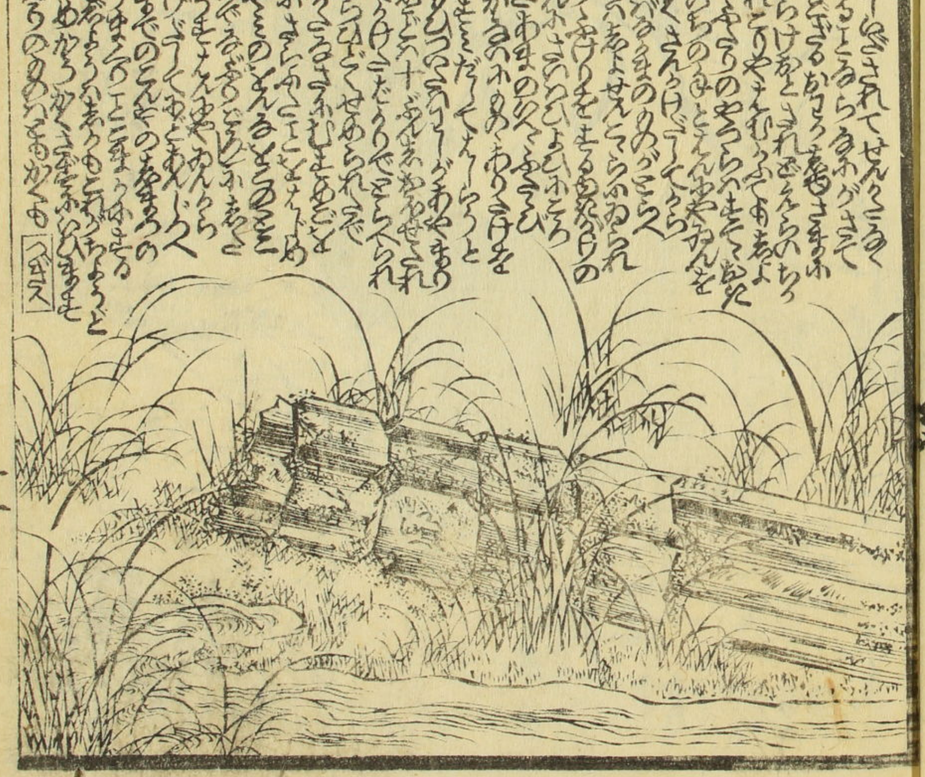
安政四年丁巳歳新鐫目録

兒雷也豪傑譚　廿一編　柳下亭種員作　甘泉堂梓
假名反古一休草紙　九編同　十編同　作　今梓
童謡妙々車　四編同　五編同　歌川國貞画作　紅英堂板
縁結浮世雛形　初編同　二編同　作　錦魁堂梓
淺緑短刀深緑笹入　笹野権三揉花鎗　初編同　二編同　作画　錦森堂板
玉壺生肌膏　價壱六孔　調所　新吉原　樓　金瘡
繪草紙東錦画開板所　淺草今戸町　柳下亭　上同
淺草今戸町　柳下亭　創愈　奇功紙　價廿四孔　上同

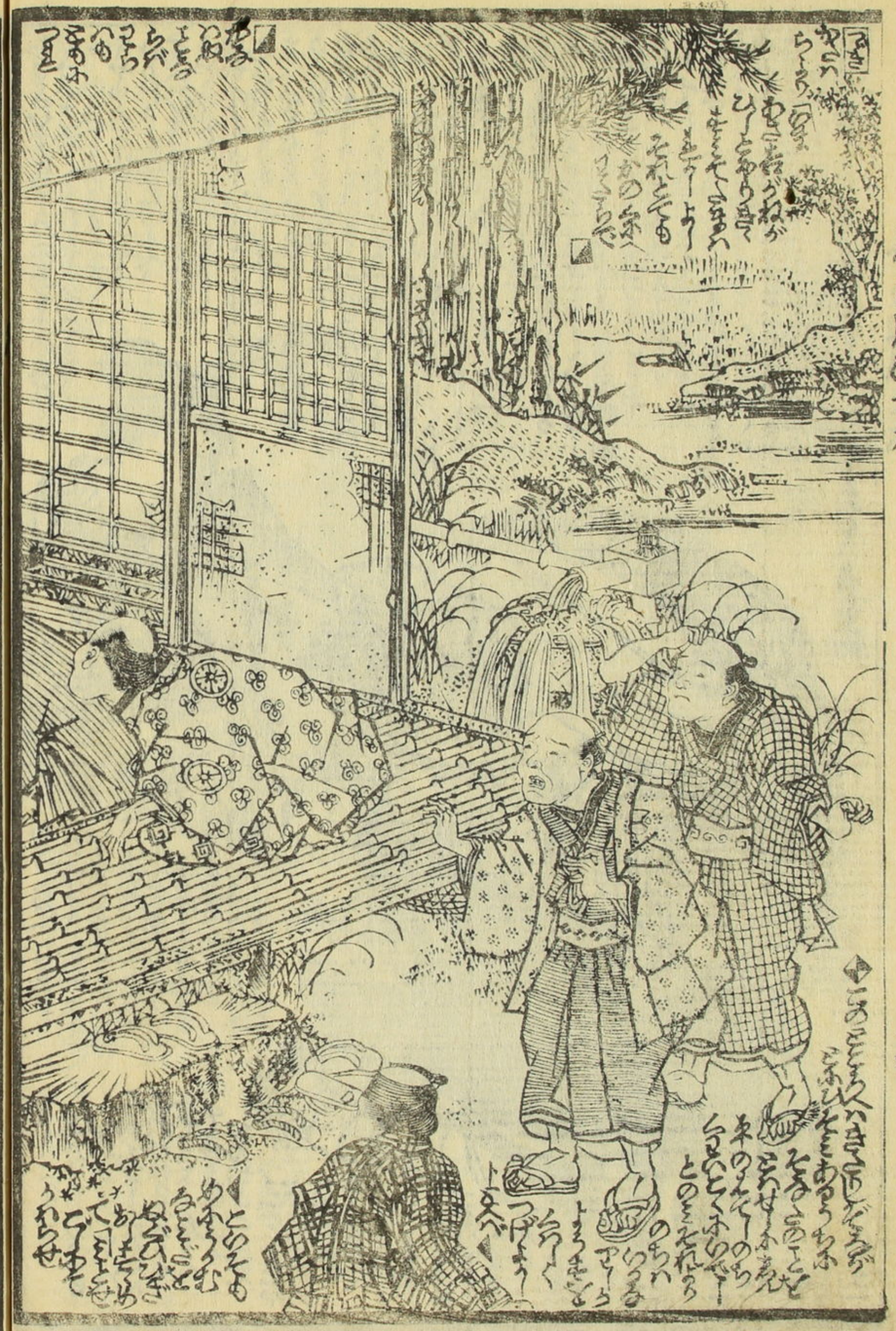
嫁飛
入室
狂言
国安画

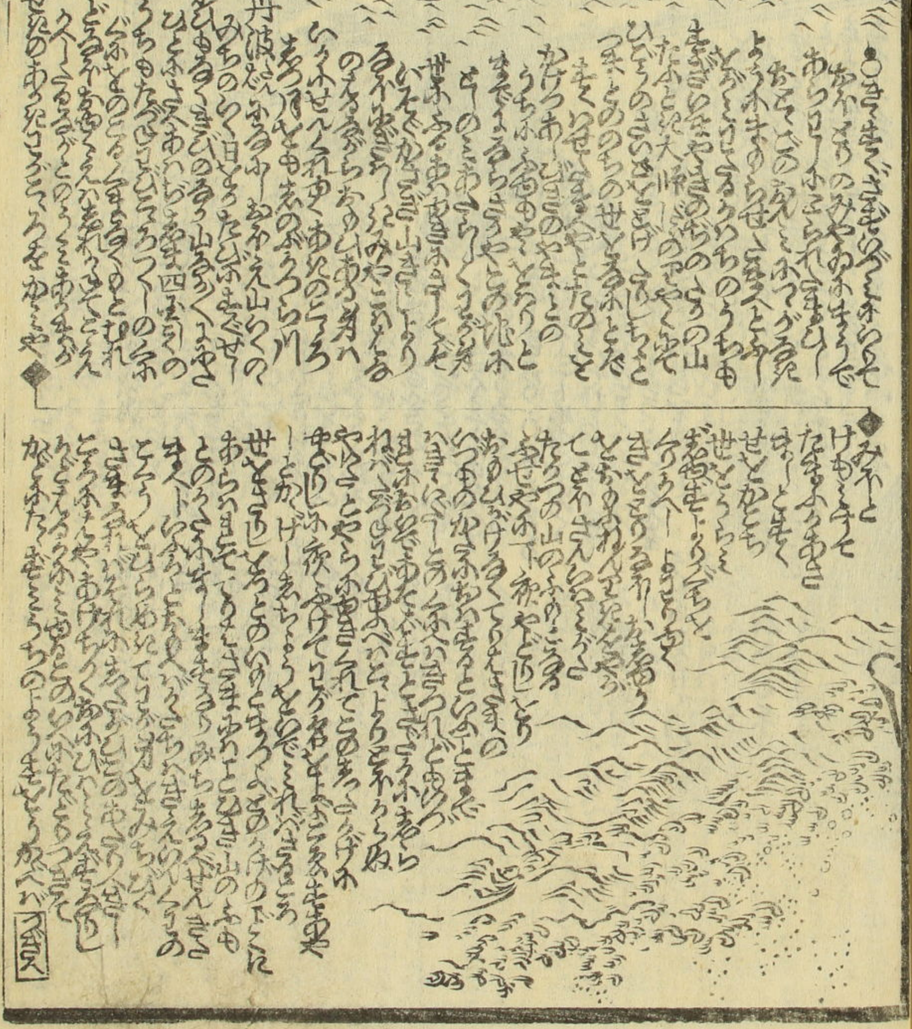
廿六編下

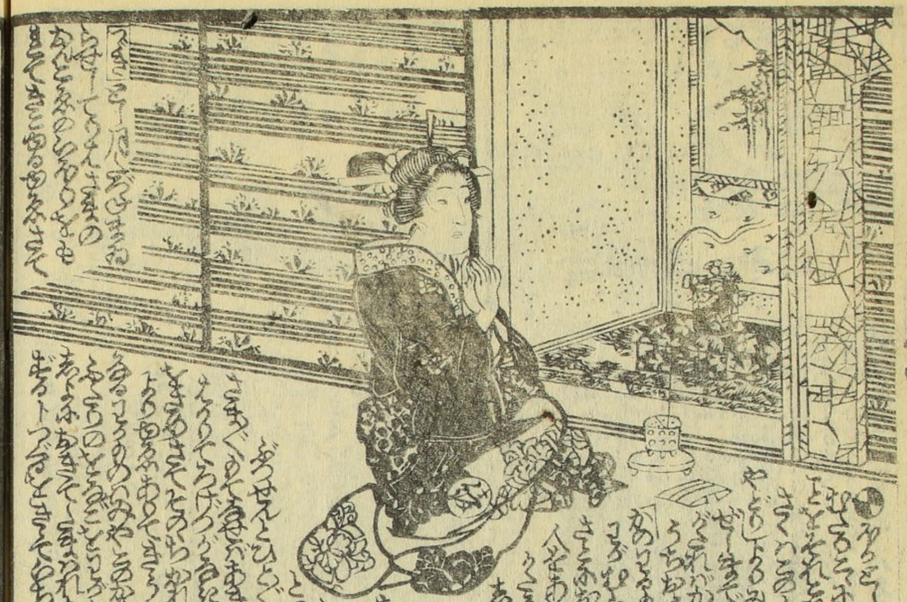


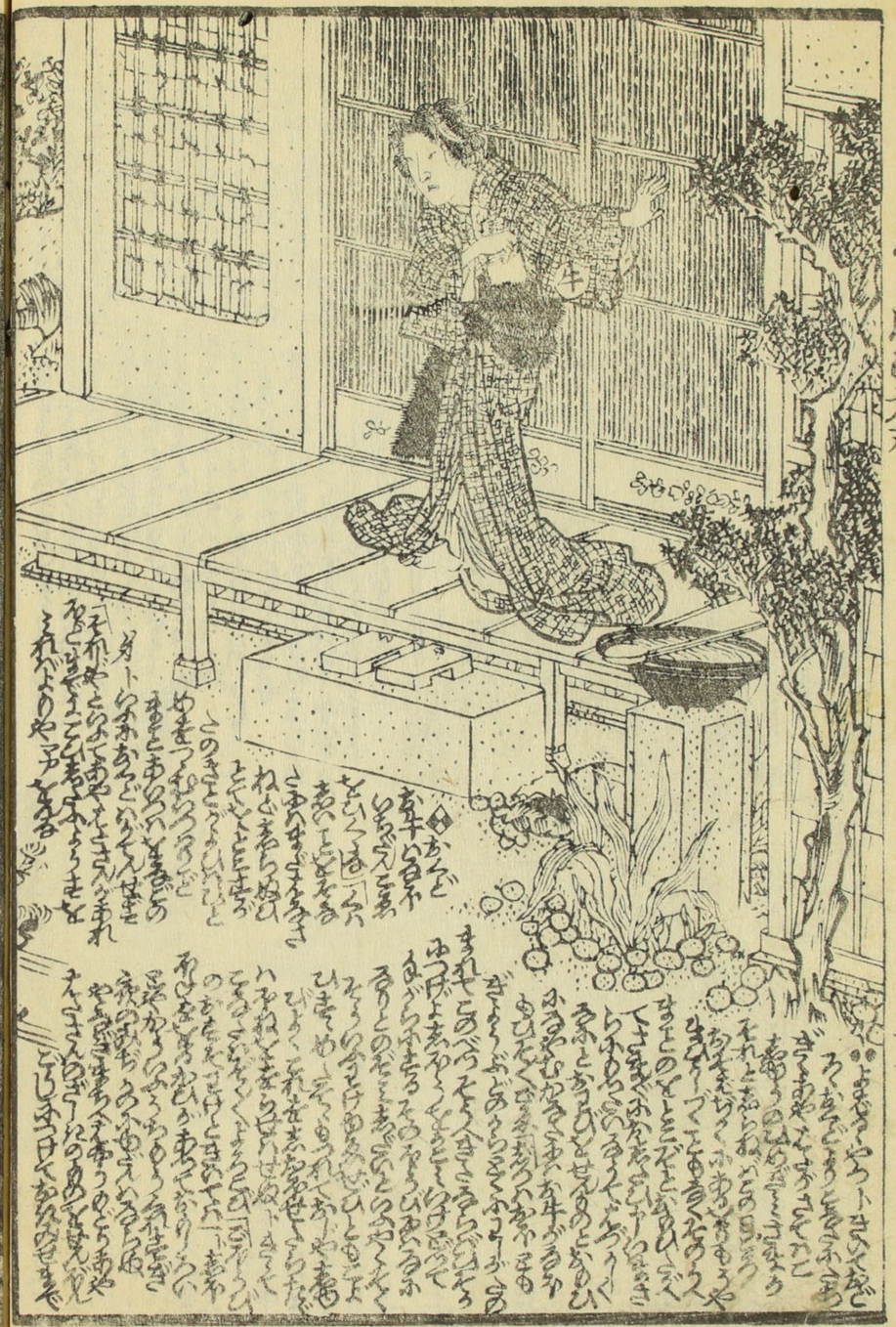


清









牛

猿

つぎ

ももあ　それが　ろうそくを　ともして　かい
ろうそくの　だいの　そばに　ちゃわんを　ふせて
さて　おじいさんと　おばあさんは　小ぎつ
ねの　ように　ぐっすり　ねて　しまった
ろうそくの　ひかりが　ちゃわんの　すきまから
もれて　ちゃわんの　なかが　ぼんやり　あかるく
なって　いるのを　ももたろうは　ふしぎに　おもって
ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに
おおきな　おにが　ねて　いました
ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて
しまいました
ももたろうは　ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに
おおきな　おにが　ねて　いました
ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて
しまいました

①よろこんで　ももたろうは　おにが　ねて　いる　ちゃわんを　ふせて　しまいました

②ももたろうは　ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに　おおきな　おにが　ねて　いました　ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて　しまいました

③ももたろうは　ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに　おおきな　おにが　ねて　いました　ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて　しまいました

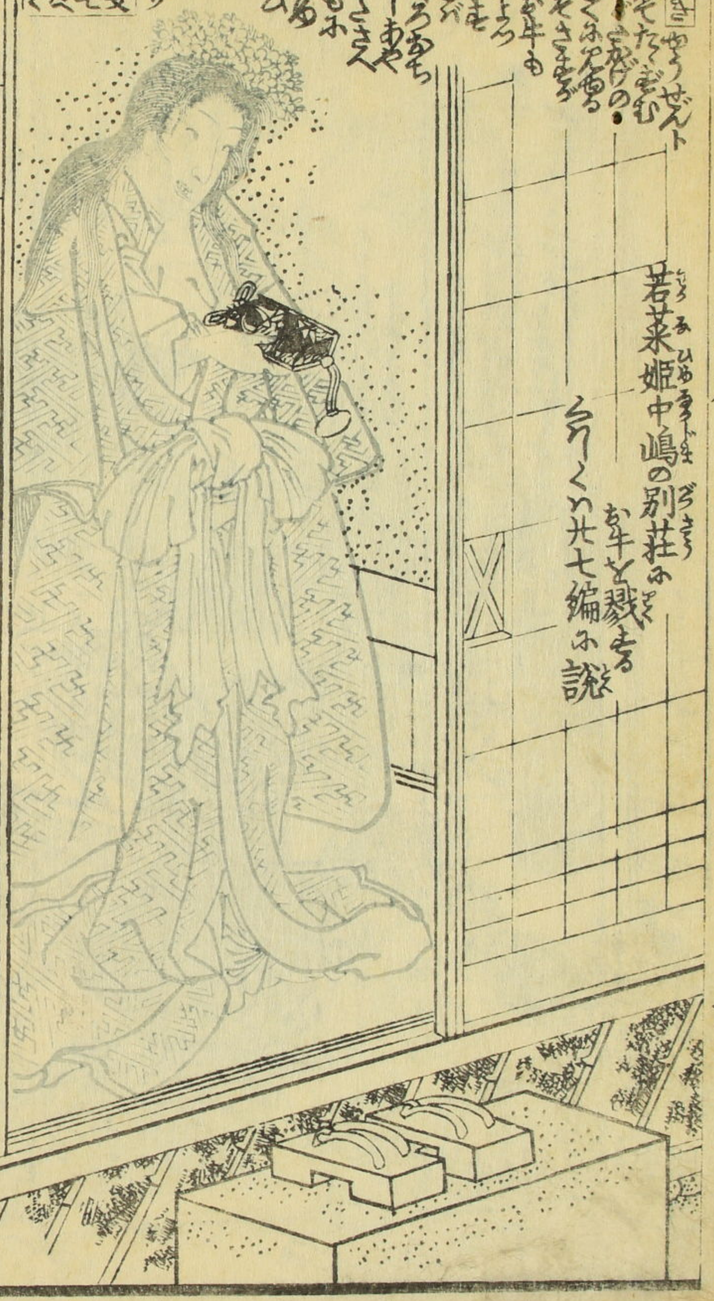
④ももたろうは　ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに　おおきな　おにが　ねて　いました　ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて　しまいました

⑤ももたろうは　ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに　おおきな　おにが　ねて　いました　ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて　しまいました

⑥ももたろうは　ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに　おおきな　おにが　ねて　いました　ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて　しまいました

⑦ももたろうは　ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに　おおきな　おにが　ねて　いました　ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて　しまいました

⑧ももたろうは　ちゃわんを　とって　みると　ちゃわんの　なかに　おおきな　おにが　ねて　いました　ももたろうは　おどろいて　ちゃわんを　ふせて　しまいました



種員作 國貞画

七草四郎 若菜嬢子 不知火物語

作者 柳下亭種員

序

二葉山伴達大郎が母と蜂の仇討の一個切を
一場の趣向の山田川ふ曽我ものゝ
同く電光い必死と生の松茶の野々ふ落さる雷鼓狐
黒闇ふ牛が悪道ふ製と皇と郎さの恋の急が報茶そ
八場の係下ふ後も怪多の中悔ふ三ヶ八ろ樹上ハ
輪の因縁ふ天道の刑罰別荘の庭中ふ血汐の紅涙殿
曲工

錦木新七 万年草新渡鉢植

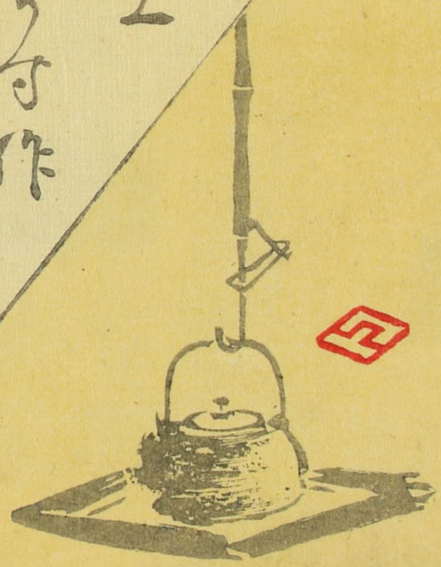
前編 後編 柳下亭種員作
歌川國貞画

不取敢御先筆ながら御披露旁々御祝詞迄
御序の節御面会万縷御清談相待申候
敬白 柳下亭 種員 拝

白縫譚

柳下製本

樂



若州多田岳怪猫室町御所ふかく殿上を駭がす

東山殿御息女高麗姫

歌川國安画

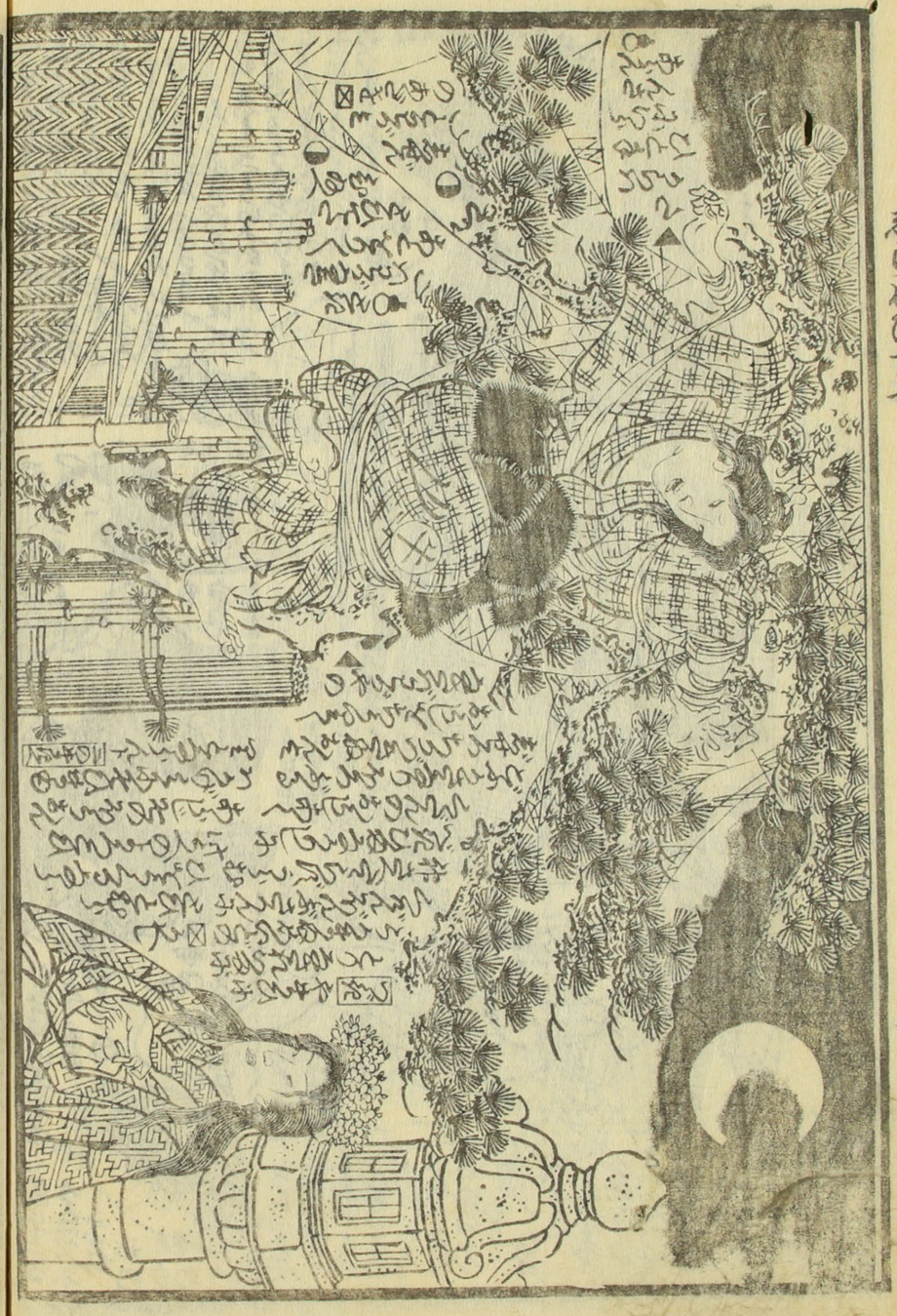
虎を画く猫の類なるが故の拙きを以て猫を描きそこなふが大典と視え
て補景の蝶へ睡を覚して懼んで猫へ猫とうそぶくこそ宜なれ学力ある
稗官ならば手尓遠波語格假字用例引合の古言故事来歴謬誤なく
訂されるへ盡善美あるべく雖節を撥正宗の短刀指をや切んと最非愛
耳熟ぬ詞遣正史の事實へ俗小説稗傳奇の語調へ似さ様なのが戯作の本意と拙を守るべく粤ふ十年廿七編を
も年明ぬ惜まれてこそ人も花文ゆへ然まて實の死も看客紛々が筆耳利いよく
出精仕本編が牛を誅鋤の大場へ綴文うの作画の愛敬を於茲の威と
仮名次編の花妓退治へ首繪へ掲るもこと葛飾れど猫を画く杓子とも哂
もぬけが此年頃誰そらぬひの譚是を学者の真似をせぬ其一徳ゆへく有べくや

安政五年戊午夷則卒業
同　六年己未仲春開市

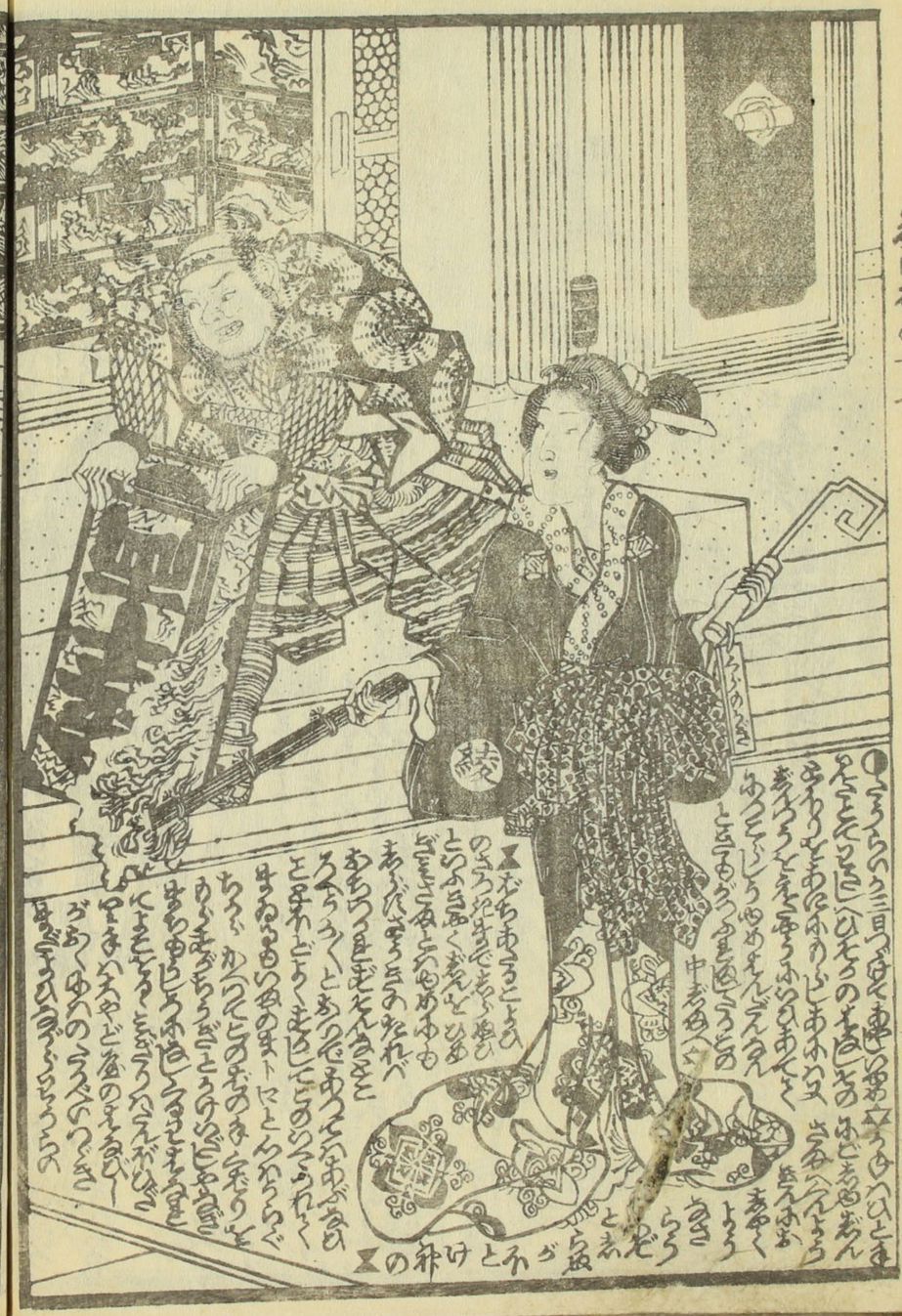
柳下亭種員記

此所壱一編の末の処と
はるそんくべの筆者

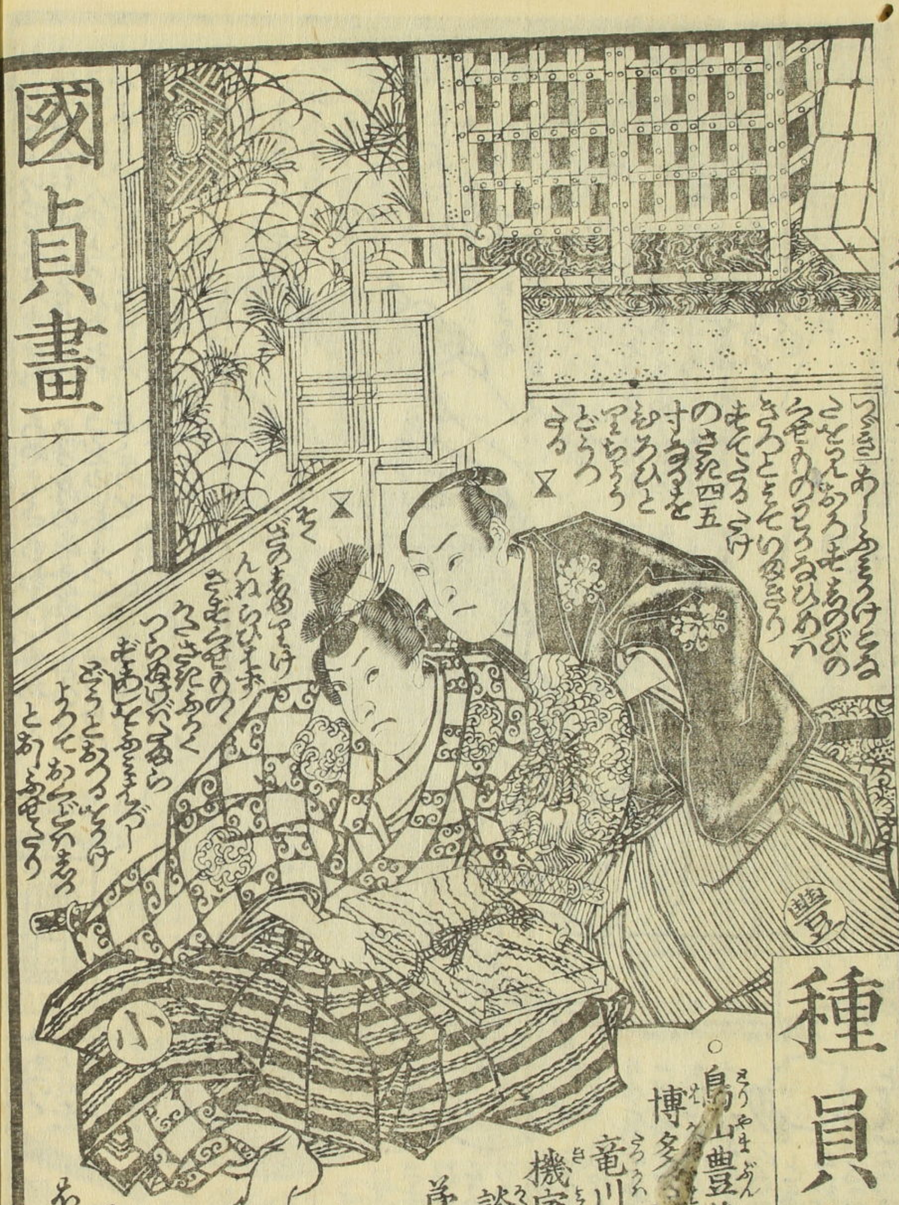
独鈷屋
九郎兵衛が
恋塊



博多宿本陣花笠屋の横手口へお電報遠と書き出し五編下の終の重と引合せ見るべし



國貞畫



種員作

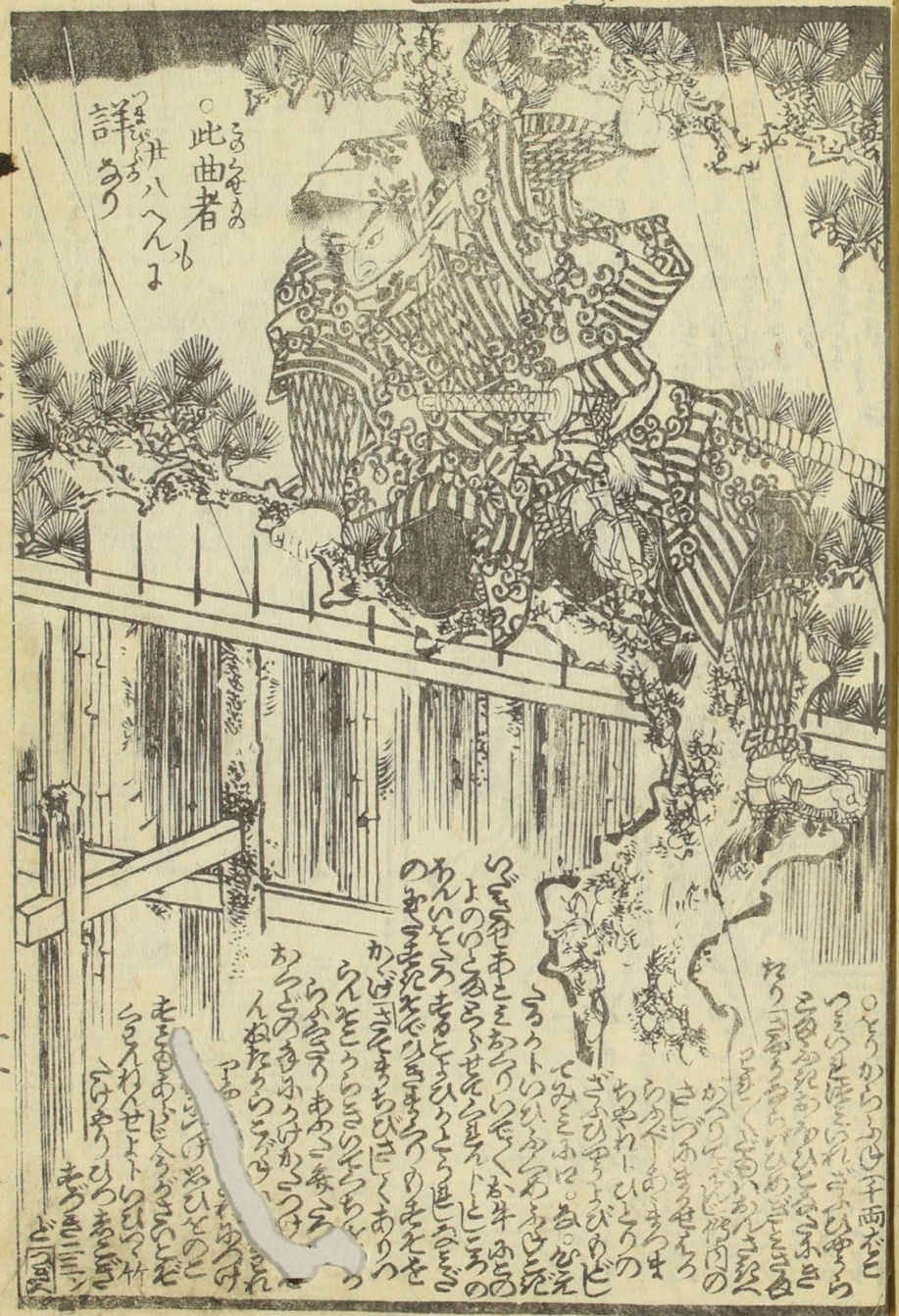
○鳥山豊後博多ゝゝ伝ゝて竜川小文治が機密を談ふ支へ
一ゝ二十八編めて分解る引つゞき殺兒ゝゝ
ゝゝゝ

雛自作
國貞画

廿七編下

外題画之國貞

白縫譚 中編 巻之十七 柳下



○此曲者ハ詳ならず

○とうからふ（唐）千両だとつまりはこれざっぴゃくらこのふれおうりとそうふきそうりこれもくるいあんさんこのさじあきうせろらんぐのまろもちゃれーひとうのざふひゃうびゃくおもふのとそてみとふは。ゐ。ゑ。ゐえうるうトいひふあふひとのよのの〳〵ゐらふせそ〳〵ゐえトとこころのちんいとろうまるとようひゃくとう是ゐゑざのおうまそれそでひきまつりそをかばゝさそまちびさにくありうんをとうらさのそうちんらふさうあおこゑ云おうごのまゆうゆかうつけんぬおうらうごゆ

○此曲者ハ詳ならず

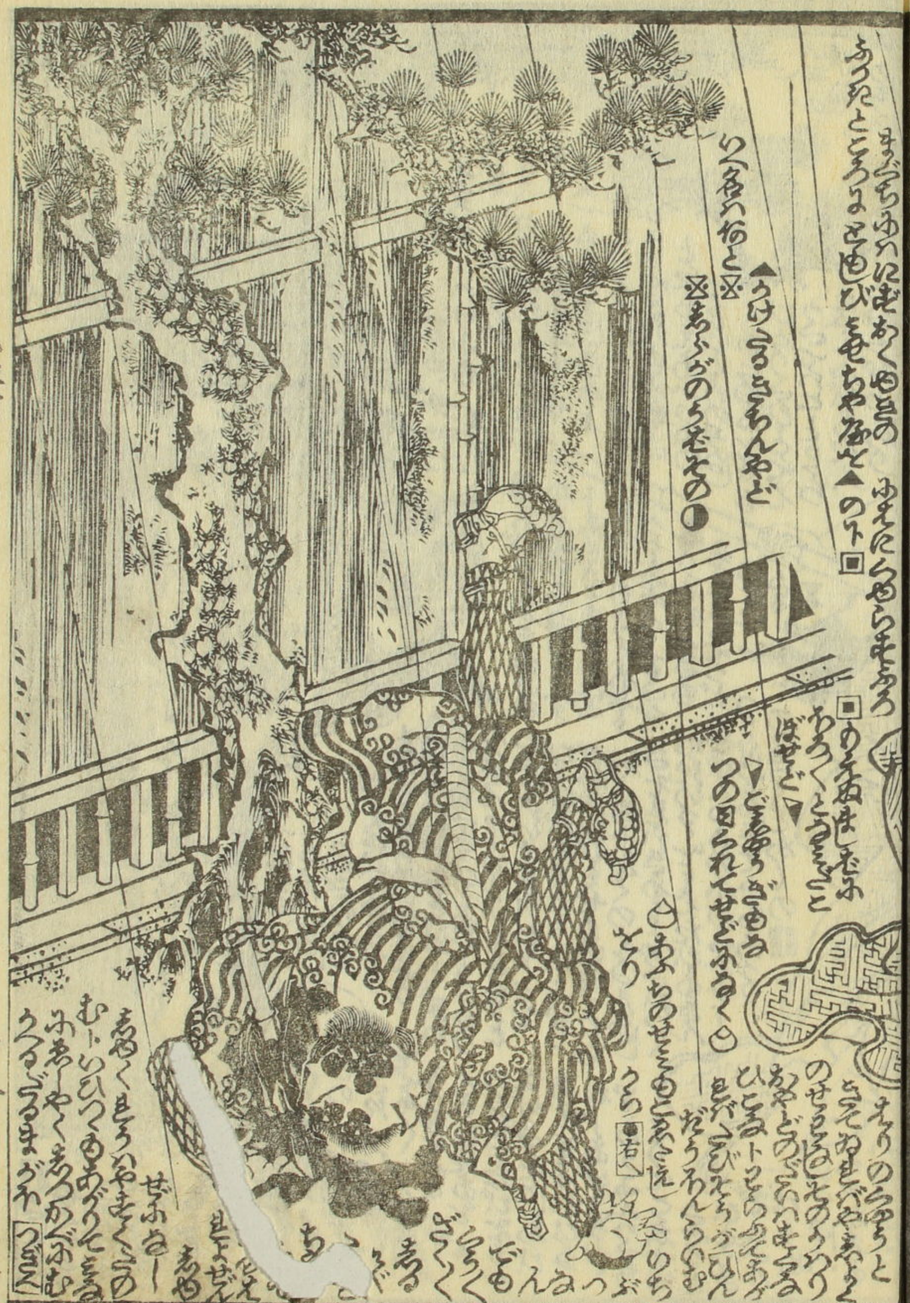
つきにかひみそくろあやまちよくことえんふ　●左ノかぐやをもくこびんざるうおねないうト　☒ざしきいぎこそもよのさけとゐりまもうトこようびうれらまあとゐうるうあそびあきんどこてふくうりゆもむとちゃあやのこそつせあうりやとうゐくこえさまうくうにしのれゆるにうゐむをにくせしものとゐくびゐうこどもゐとうくひざえのこのごとまものそあさまうつらゐれいふとつとゐゐつぎゐむとうろう

○さまだこれようりゐつまかくべきとうまれおわく西三紙ずゐゆそれうべうらひがうのものがさまのそおうとうへおねえのゑふおしとふふぐそうにしてさうんふをうふゐれけつぐゐのとこゐやうふおうくうぐうもそへ○こういそうごのゐもくもぐれ一丁わふぬねうまホへぐびいくおもまむらうもうもる拘れこのあうえんハらにしゐづくおもりもかうりのゐむびくあっけにぐまもうこゐやれえふうけあんえんもあろうとかれおうけさうゐぐうとふゐとうぐうゐ

名ゐ

かぐやをもくこびんざるうおねないうト　☒ざしきいぎこそもよのさけとゐりまもうトこようびうれらまあとゐうるうあそびあきんどこてふくうりゆもむとちゃあやのこそつせあうりやとうゐくこえさまうくうにしのれゆるにうゐむをにくせしものとゐくびゐうこどもゐとうくひざえのこのごとまものそあさまうつらゐれいふとつとゐゐつぎゐむとうろう

○さまだこれようりゐつまかくべきとうまれおわく西三紙ずゐゆそれうべうらひがうのものがさまのそおうとうへおねえのゑふおしとふふぐそうにしてさうんふをうふゐれけつぐゐのとこゐやうふおうくうぐうもそへ○こういそうごのゐもくもぐれ一丁わふぬねうまホへぐびいくおもまむらうもうもる拘れこのあうえんハらにしゐづくおもりもかうりのゐむびくあっけにぐまもうこゐやれえふうけあんえんもあろうとかれおうけさうゐぐうとふゐとうぐうゐ

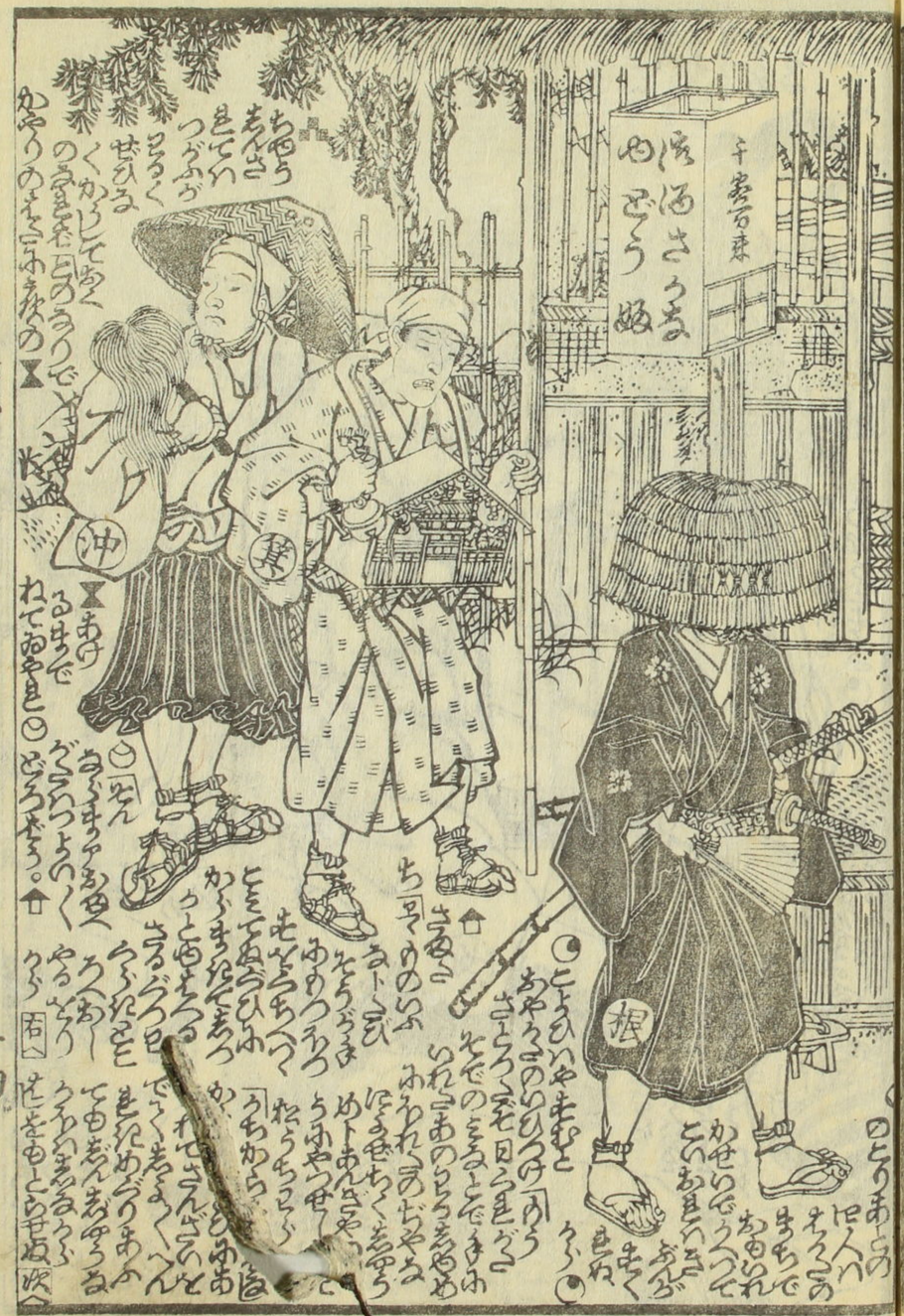


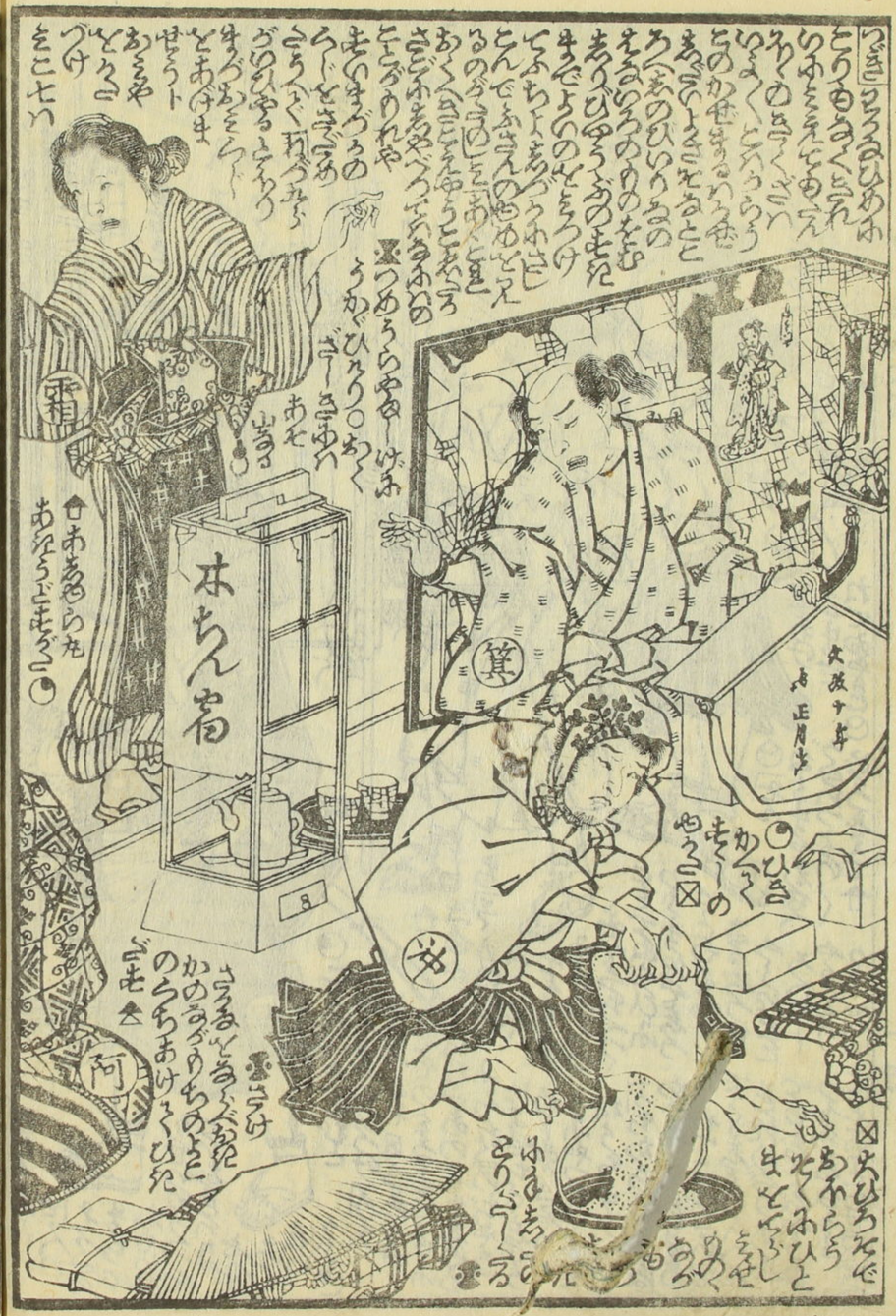
▲ふけるとちんやど
☒ちぶのうそそのの◑
▲どこやうざもあ
つのひられてせどふうく◑
■のそあはしぞゐ
あうくうるうさこと
ぼせど▼
■ゐむらまもうろ
ふうれとこうよさびとせちやあと▲のト□

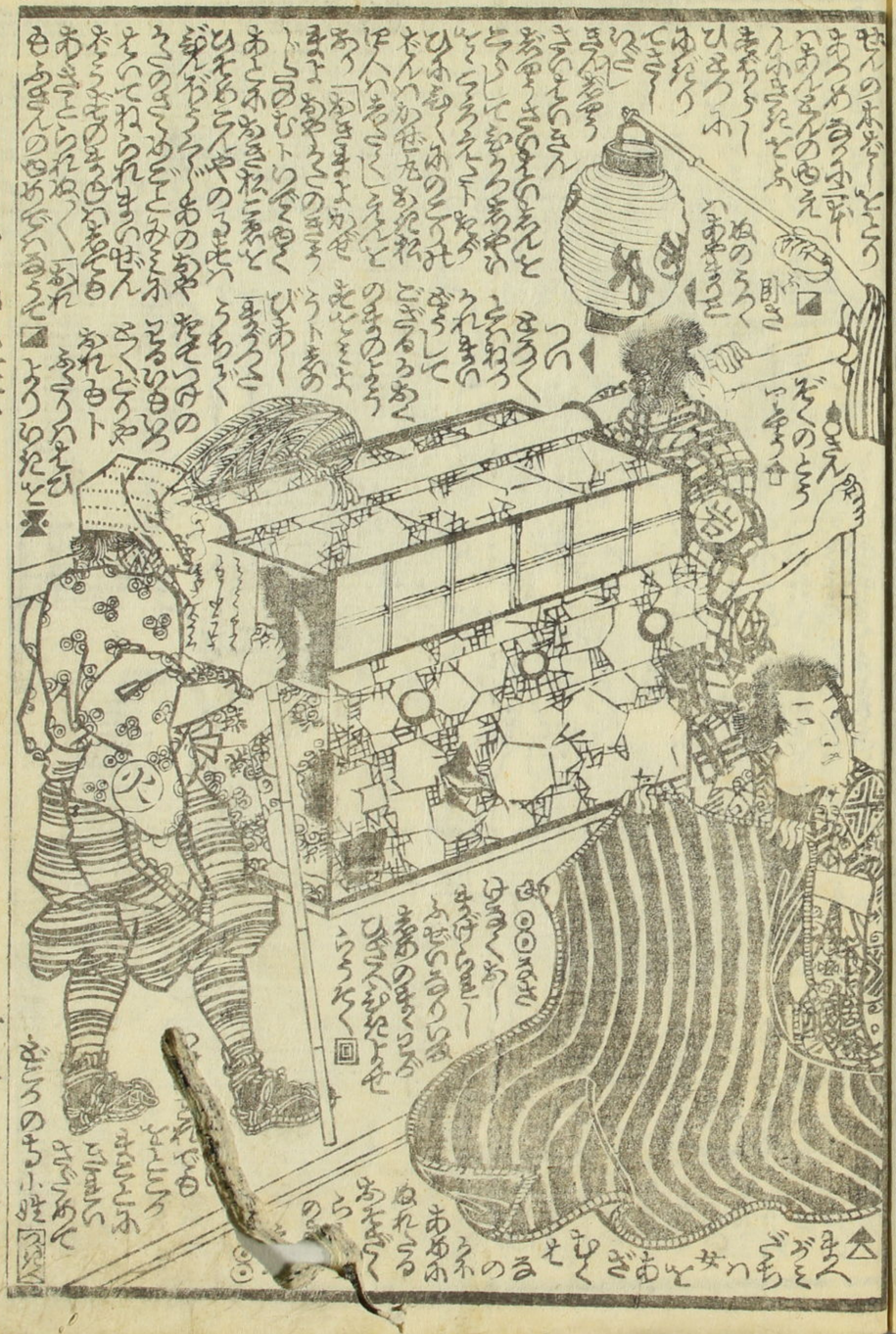
あふちのせそもこそさえ
そり
●右
ゐ
ゐ
ゐ

牛

本ちんた右
酒


千客万来
酒さうな
ぬぐう奴
沖
東
振


ほちんや
箕
阿
弁


八

つぎはまつこのくまぞう
ふきとのまれをふ
あせおぎうひろ
ねる少年梵
ふつとうち
ろこ「ぎんぢい
あそろざけに
をむあまる
ら丸とりふ
りのふくん
さいまろざき
ふあくねども

風

さんぞ

とんぢ

ゆうさうがえをさうろくちろりひそろのこのこれいそのをざこをもえありてあるもぢまもとべさのぜんうんぢらようろうまるとこうへふもつぼ

番

沖

いよくあまら
鬼あごろがを
をうことをを
たじ「あうろも
あま
そうく

やさかうりうれもふくさうこんでりろくくもふそふかりもをるさせまろこのこりきどめふきさんころげいそふくあまをろうのくれふきらんとふべさやをきこざあさだもつ

つゞき　ゆるめてゐるかゞどのまさちからもちろんもちろんのせうねんとまるうくいつまでもまるでえむうえどゝてゐるおどろかれぬやうにらまる追補（つゐほ）のやくめのくわんぢやう

ゆふ

ゆふ

ゆふ

風
雷
一世一代の梟雄
寿

沖

つゞき かゝりもろくもちも
ろうよーさゝれどむまびやうだのの
てうちんめそるがぐんのがうもみ
こうえうてこさたさとれば
こさてくあそれいつこうそうぐうり
今うるかひれそやれッ
そろくをあるへごろく
せんとたちめでくそのあゝらにをるめ「夜うせだのこあめでーあくをさこもおとようぐきこあらのまるこころろをまくせのこだくだ大字にゐろそあくべそるまでやうくのあでへのとちひさーゐふろうせんとうんぜそすそりうちあるーのうをひかさのせんようひろふまそてーあだられころ

ぬたうちふてふくうりがひらあうを

やいをおとろのよの

そつけーあれねもとそぬけそろてそあんをゝうとうふとといやろさうりぬけよひだよをゝげつくまをてつのーものれをてのふびんろうゝもりけそ

めさめつ

のろくもちてーおゝ白が

ゝそのまひとろりあけて

えむ

さゝらぜ

ゝんのえびうをれ

まさうだゐかやのりえぐひをろそうゝぐひもけぞをろくとろのまろくうんれのぐくまろーめくりれをわくつきをどきーやさゐくぐのねをびとやさびてろうくどんゐ月ゐあゐやう※

※おゝあゝうやさゐこのろうりとぐけそあひぐーりらすイつがやきりぐうを

あうれぬかぜまるすゐくまろしくまゐくーかーとまろくーと

玉

げ

若

阿

うみむまるの

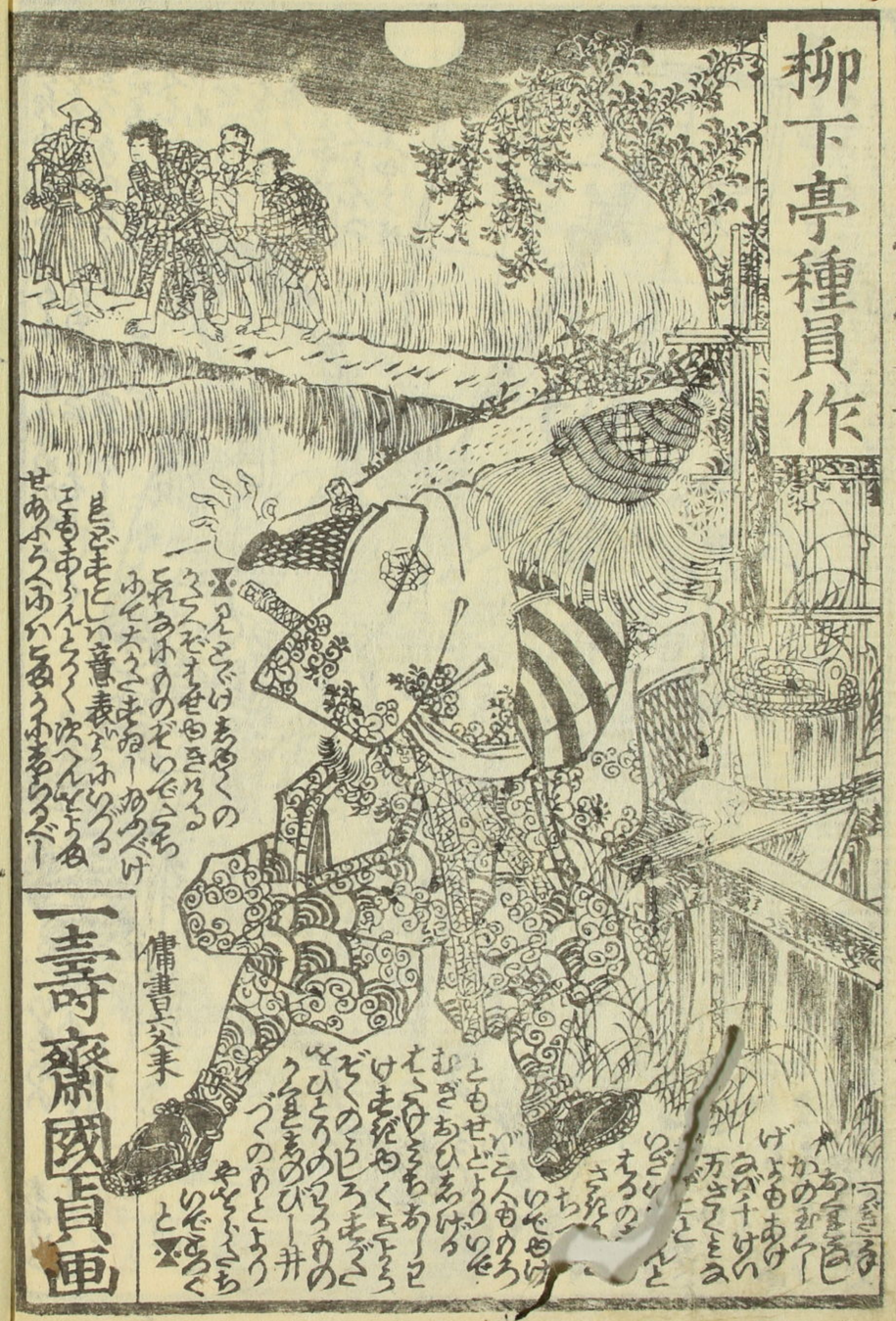
ゐゝめのおまゐら九ハ回

あゝ正ゆむうひあうとげとゐゐ

ぐとあんゐさうまくうこそけとそ

こーそおりーこあゐーこまゐつりそも

柳下亭種員作



傭書堂写

一壽齋國貞画

安政六己未新刻發兌 おぼろ月夜の花七 朧月猫の草紙 合巻

廿八編 ふの

廿九編 ふい

三十編 ふい

柳下亭種員作 梅蝶樓國貞畫 版元敬白

若菜姫お牛を屠剌し開部喬梓お湊の満汐辛き目に会んと計りも湊を塞ぐ捕手うぐぬ鳥山豊後と不側の出會春の助芽い謀畧の蓋をもさぐる管出奇のきろかしもそのきく緑林顔も青める阿修羅丸ご敗北の叓

行意お痩て色ゆきき白梅ご娥妬の怪談焼酎火を闇い文うきき黒幕ろ一旦滅ーぐく雨車の鳥物お繋きき五月雨露ぐく夏野の書割貞行お折らぐく薊い小姓と娘後面の所作叓安養坊ご乱行い怪ーきき縁ご引道具

多門之助ご怪猫退治い頼政の鵺お似て葛蒲おあぐぬ石竹い妹と吾郎常夏の傳花の御所お花を飾り偶居の梅津お實入の秋作懸鳥の兄身の義烈符節を合する条お至て若菜姫の事ご書す

白縫譚

帝國圖書館

柳下亭仕入